

やまとの名品 天理図書館

to be afraid. My name in those days
 was Daogai Heidazaemon ^{the} Tatsuwa;
 - of Kyushu; - perhaps there be some
 samurai of Shimano who remember
 it. "

And indeed there proved to be
 many persons who remembered the
 fame of the former man-at-arms.
 At once the ^{ambitious} attitude of all these points
 changed to admiration and paternal
 kindness. Kivaiyō was not only
 released with ~~honour~~, but ~~respected~~
~~to be feared~~, ~~but was~~ ~~esteemed~~ ~~with~~ ~~honour~~
~~and~~ ~~introduced~~
 to the ~~hand~~ ~~of~~ ~~the~~ ~~place~~ ~~who~~ ~~caused~~
 him to be feared & bestowed upon
 him many gifts of worth. When
 Kivaiyō had left Suwa, he was
 a rich priest - and was able to ~~take~~
 about ~~himself~~ a temple. He was
 allowed, of course, to take away the
 head with him, as he feared,
 no doubt that he kept it only for
 a mirage.

くび 草稿 「ろくろ首」

小泉八雲自筆
 [明治37年以前] 筆 零葉
 縦20.5cm 横14.0cm

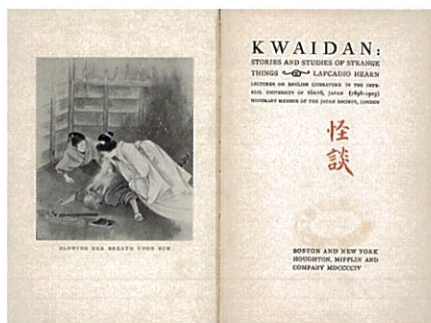
天理図書館 「ろくろ首」草稿

幼い頃に一度は、「耳なし芳一」や「雪女」、あるいは「ろくろ首」などの怖い話を聞いたことがあるでしょう。しかし、これらの怪談は、純粹に日本古来のものというわけではありません。実際には、これらの作品はある外国人の手によつて編まれたものです。

一八九〇（明治二十三）年、ギリシャ生まれのイェルランド人作家が来日しました。後に日本に帰化して小泉八雲と名乗ったラフカディオ・ハーンです。家庭的に恵まれなかったハーンは、ヨーロッパからアメリカへと渡り、文筆家として生計を立てた後、日本の地を踏みました。

日本では、島根での英語教師を皮切りに熊本、神戸と移り住んだ後、東京帝国大学に英文学講師として赴任しました。

晩年の八雲は、セツ夫人に日本の古典にある怪奇な物語を語らせて、それをもとに「再話文学」と呼ばれる作品を数多く綴りました。その中でも最高傑作とされるのが、『怪談』（Kwaidan）で、ハーンが亡くなる一九〇四（明治三十七）年に出版されました。本書には冒頭の三作品を含む十四篇



の再話物語が収録され、怪奇の恐怖と美が平易で象徴性の漂う文体で描かれています。

「ろくろ首」は、じっぺんしゃいっく十返舎一九の『怪物輿論』を原典とする作品。掲出の自筆草稿は、死んだ抜け首（ろくろ首）をぶら下げていたために捕らわれの身となった僧が、自らの出自を明かした後、大名屋敷に招かれ、褒美を賜って出立するまでの場面が描かれています。

（天理図書館 三濱靖和）

天理図書館のお知らせ Tel: 0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）
○4月の休館日: 18日・27日・29日
（本資料は、5月13日～6月10日開催の、天理ギャラリー第164回展「小泉八雲 ラフカディオ・ハーン」に出品します）